東京未来大学研究紀要　2011年　第4号　pp.17-25

学級担任による小学校外国語活動

―新宿区立戸塚第一小学校の事例報告―

カレイラ松崎　順子・執行　智子

Foreign Language Activity Taught by Classroom Teachers:
A Case Report of Totsuka Daiichi Elementary School

Junko Matsuzaki Carreira and Tomoko Shigyo

要約

新宿区立戸塚第一小学校は平成19・20年度文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校及び新宿区教育委員会研究発表校、さらに平成21年度文部科学省「外国語活動における教材の効果的な活用および評価の在り方に関する実践研究事業」研究校として「自ら輝き　ひびき合う子―英語活動を通してことばの力を育てる」という目標を掲げ、担任主導の外国語活動の授業を行い、他教科の内容など児童が学習したことを活用した授業を行ってきた。ゆえに、戸塚第一小学校の事例は平成23年度より正式に必修化される小学校の外国語活動に様々な示唆を与えるであろうと考え、本稿では戸塚第一小学校の5・6年生のシラバスおよび今まで戸塚第一小学校で行われた研究結果を検討しながら、戸塚第一小学校の事例から日本の公立小学校は何を学ぶことができるかを考察していく。

キーワード

外国語活動、学級担任、内容重視の指導、日本語使用、タスクを志向した活動

1. はじめに

日本の小学校において外国語活動が平成23年度より正式に必修化されるが、小学校学習指導要領解説外国語活動編に「授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行う」(文部科学省, 2008, p.18）と記載されていることから、今後小学校の学級担任がより一層外国語活動に携わるようになることが予想できる。また、指導内容や活動については、「児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」（文部科学省，2008，pp.16-17）とし、「児童が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような、興味・関心のある題材や活動を扱うことが大切である」（文部科学省，2008，p.17）と記載されている。今まで、小学校における様々な外国語活動の実践例が紹介されてきたが、それらの多くが英語のできる日本人講師やAssistant Language Teacher（ALT）を主導に行った授業が多く（e.g.，カレイラ・大久保・秋山・田邉，2007；杉浦・東野・高島，2006-2007；東・スナイダー，2003-2004)、学級担任を中心に行った授業の実践例は少ない。

ところで、新宿区立戸塚第一小学校では、平成12年より平成15年まで国際理解教育の一環として、「小学校における英語活動」を研究し、その後3年間、コミュニケーションの研究を国語科に移す傍ら英語活動を継続し、平成19年から新宿区教育委員会研究発表校、また文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校として研究を再開し、さらに、平成21年度文部科学省「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方に関する実践研究事業」研究校として、学級担任主導の授業を行い、他教科の内容など児童が学習したことを活用した授業の研究を行っている。ゆえに、戸塚第一小学校の事例は小学校の外国語活動に様々な示唆を与えるであろうと考え、本稿では戸塚第一小学校の5・6年生のシラバスおよび今まで戸

塚第一小学校で行われた研究結果を検討しながら、戸塚第一小学校の事例から日本の公立小学校は何を学ぶことができるかを考察していく。

2. 小学校外国語活動で行われている指導法と日本語使用

（1）内容重視の指導

他教科の内容と第二言語スキルを同時に学ぶ方法として内容重視の指導（Content-Based Instruction: CBI）があげられる（Brington, Snow, & Wesche, 1989）。CBIは英語教育においては、英語の言語形式の習得のみに焦点が置かれていないため、英語自体に興味のある児童だけでなく、英語にはさほど興味がない児童に対しても、知的好奇心を刺激する情報を与えることができる（カレイラ他，2007）。日本の公立小学校においてCBIを取り入れた外国語活動を行っている小学校がいくつかある。たとえば、岐阜県の多治見市立笠原小学校は、同笠原中学校と共に平成15-18年度の文部科学省研究開発学校に指定され、「児童の発達段階に応じた『英語によるコンテント・ベイスト・アプローチの手法を取り入れた小中一貫した英語教育の時間のあり方』に関する研究開発」の課題に取り組み、さらに平成18-20年度の指定により、「英語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする子の育成　～コンテントベイストの手法を用いて～」を研究課題として研究を行った。笠原小学校の実践報告（多治見市立笠原小学校・笠原中学校，2005，p.4）によれば、同校はCBIを取り入れる長所として以下の3点をあげている。

1. 伝え合う内容がはっきりとしており、コミュニケーションを図る目的をもちやすい。
2. 言葉が繰り返し使用される場面を設定し、その中で「内容」を伝えるために必要のある言葉が繰り返し使用される。
3. 学習内容に興味を持てば、その中で使用される言葉も児童にとっては生きた言葉として感じられ、英語の語彙や表現を理解していくことが容易である。

その他、カレイラ他（2007）が小平市の小学校において、米を使用したCBIの授業実践を行っている。カレイラ他によれば、研究に参加した児童は、米の内容を扱ったCBIにより、英語や米に対する関心すなわち彼らの知的好奇心を高めることができ、外国に対する関心や外国人とコミュニケーションしたいという思いを高めることができたと報告している。

（2）タスク活動

タスクとは、結果をともなう作業計画であり、そこには現実に起こるような言語による意味のあるやりとりが含まれている（Ellis，2003）。東野・高島（2007）ではこれを整理し、タスク活動の必要条件を以下のように述べている。

1. 言語を使う目的がある
2. 意味内容の伝達が第一義である
3. 話し手間に、情報・考え等の何らかの差がある
4. 学習者が自分で考えて言語を使う（p.11）

しかし、タスク活動はEnglish as a Second Language（ESL）の環境で発達してきたため、日本のように、インプットの少ないEnglish as a Foreign Language（EFL）の環境に適合させるのは難しい。ましてや、これから始まる日本の小学校における外国語活動は5・6年生の2年間で合計70時間のみであり、このような環境にタスク活動を持ち込むことは根本的に無理がある（東野・高島，2007）。よって、東野・高島ではタスク活動を日本の小学校で行うために「タスクを志向した活動」とし、以下のように修正した。

1. 言語を用いて課題解決をする目標がある。

2. 2人以上による情報の授受・交換を行う。
3. 話し手と聞き手に情報（量）の差がある。
4. 指定されたモデル・ダイアローグなどにしたがって活動する。（p.12）

このようにタスク活動を修正することで、表現内容や方法を児童自らが選んだり決定したりする自由を保障し、児童に主体性を持たせる活動とすることができるため、語彙や文法構造などの知識が十分ではない小学生にも、課題解決的な学習が可能となる（東野・高島，2007）。

（3）日本語使用

吉田・柳瀬（2003）では、コミュニカティヴィ・アプローチの特徴に日本語を介在させることの有効性を以下のように述べている。

1. 目標言語によるinteractionが抽象度の高い説明や、知的作業が必要であったりする場合、EFLの環境にある日本では、全てを目標言語ですることは、難しいと思われる。このような場合、学習者にとっての母語である日本語を使用することは、授業をスムーズに進めるうえで、効果的であると思われる。
2. 使われる教材、交わされる会話などがauthenticであるが教材や会話によるinputが学習者の理解できる程度を超えている場合、その教材や会話の内容を理解させるために、日本語を導入することは、避けられないであろう。
3. 授業の結果として身に付いたproductよりも、身に付けるprocess自体がコミュニカティブであることが望まれるが、EFLの環境である日本の学習者の場合、内容をすべて英語で伝達するのは、負担であり、不可能であることもある。また、伝達できないがために、コミュニケーションが止まってしまっては、意味がないので、一部に日本語を組み込み、コミュニケーションの流れをスムーズにするのは、効果的であると思われる。
4. 使われる教材や交わされる会話などが学習者ひとりひとりにとってpersonalizedされるほど、学習者は、その個人化された内容を表現したくなる。その時に、英語力不足により、表現したいという欲求を押さえ込んでしまうという事態を引き起こさないように、日本語を用いることは、効果的である。
5. 教室外でも目標言語がactivateされるために、英和辞典を調べたり、日本語の本を参照したりし、学習を促進させることが得策であろう。

さらに、吉田・柳瀬（2003）は外国語学習における日本語の使用について以下のように述べている。

> 普段はほとんど英語に触れる機会がなく、日常遭遇する様々な話題についてもほとんど英語で考えることがない環境では、全てを英語で行うということは非常に難しいだろう。... 英語で自分の意見を言わなければならないような活動になると、どうしても英語の構造に関する知識や英語による表現方法について分からないところがでてきてしまう。それでも、あえて全て英語で通そうとすると、かなり無理が出てくるし、時間の「無駄」になる可能性がある。... EFLの環境では、生徒が少なくともある一定のレベルの英語力に達するまでは、コミュニケーションや意味理解､構文理解の助けとして、日本語を有効に使うことも視野に入れなければならないのである。（p.37）

以上の考察より、目標言語の英語のinputの量的不足が懸念される環境にある日本において、英語のみでのコミュニカティブな活動が学習者の英語力不足によって困難な場合、日本語を介在させることは効果的な足場かけになり学習を促進させると言える

であろう。

3. 新宿区立戸塚第一小学校の外国語活動

(1) 研究主題および研究概要

戸塚第一小学校において平成19年度からの研究主題は「自ら輝き　ひびき合う子―英語活動を通してことばの力を育てる」と設定し、外国語活動を通して、児童が自ら目標を持って取り組み、相手との意味のあるやりとりを通して課題を解決できるようになり、そのやりとりの中で「ことばの力」が伸びることを目指している。この研究主題を設定する際に、「ことばの力」を捉えるために、「ことばの力」は「理解する力」（ことばを通して知識を増やしたり理解したりする力）、「考える力」（自分の考えをつくる力）、「表現する力」（相手に伝わるように表現する力）、「聞く力」（相手の伝えたいことを理解しようとしながら聞く力）、「メタ言語への気付き」（言語自体について気付く力）から成り、前者4つの力（「理解する力」、「考える力」、「表現する力」、「聞く力」）の根底には言語自体に気付く「メタ言語への気付き」が存在するという2層構造になっていると定義している。

さらに、Cummins（1984）の相互依存仮説（interdependence principle）を理論的背景とし、「外国語（英語）およびその文化に接し、日本語およびその文化との類似点や相違点を意識することで、無意識に使用していた日本語に注意を向けることができ、日本語力も向上する」と仮説を立て、第二言語である英語の活動で認知的学問的能力Cognitive/Academic Language Proficiency（CALP）を使用し発達するように授業をデザインすれば、第一言語能力と第二言語能力の深層レベルに存在する共通言語能力を刺激し、第一言語である日本語の能力の発達にも役立つであろうと仮定し、外国語活動に取り組んでいる。

(2) 年間計画

1年間に1つのテーマをもとに7～8時間からなる単元を4つ、また、それぞれの単元はテーマや言語材料で関連するように構成している。1つの単元内に「タスクを志向した活動」を組み入れ、その他、グループ活動、創作活動、および発表などを取り入れている。また、単元のはじめの方は、活動に必要となる言語材料に親しむ時間を多く取るようにし、次第に自分たちで工夫し作り上げる活動を増やすなど児童の自律性を高める工夫がなされている。さらに、CBIの考えに基づき、他教科で学んだ内容を適宜取り入れている。

ｉ　5年生のシラバス

5年生の活動では、児童が1年生から4年生までにさまざまなinputに触れてきたこと、そして6年生の最後の単元「自分を見つめて」において6年間の集大成の発表をするという目標を見据えて、生活と人を柱に4つの単元を組んでいる。

1学期

①　お米について

社会科で米の作り方を学んだ後、米の作り方、世界の米について英語で学ぶ。グループで特徴のあるオリジナルのブランド米を考案し、米の特徴を英語でどのように発表するかを考え、ブランド米の米袋を作成する。児童は話し合いを日本語で行うが、英語で表現することができる部分は順次自分たちでジェスチャをつけながら作り、自ら作成した米袋を示し米の特徴を英語で発表する。この活動をする傍ら、児童は実際に田植えを経験して、イネの成長を楽しみに観察している。

②　伝記「玉川兄弟」を聞いて

「玉川兄弟について」を日本語で読んだ後、玉川兄弟の伝記を英語の紙芝居で聞く。この活動は前回のテーマ「米」から関連して、米の栽培に必要な水を江戸に供給した玉川兄弟をテーマにしている。5

年生にとっては少々難易度の高い紙芝居「玉川兄弟」だが、「玉川兄弟」については日本語ですでにinputしてあるので、推測して理解できると思われる。

2学期[i)]

①　劇「三匹のクマ」をチャンツで歌おう

ゲームを通して絵本に出てきた表現を演劇手法などで学び、学習する部分のチャンツをジェスチャしながら歌う。

②　劇「赤ずきん」の結末を演じてみよう

「赤ずきん」の絵本を通して英語で聞き、自分達の作った地図を参考におばあさんに持っていくものを買い、指定されたモデル・ダイアローグ（“We went to ～ . We've got ～ .”）にしたがって発表する。さらに、読み聞かせしたストーリーとは異なる最終シーンの寸劇を英語で見て相違点を日本語で答える。

③「三匹のクマ」「赤ずきん」のいずれかを選んで練習し発表する

児童は活動を通して2つの劇のストーリーを理解するだけに留めず、登場人物になったり、設定を考えたりしながら、自分で理解したことをもとに場面を作っていく。

3学期

①　劇「大きなかぶ」

絵本「大きなかぶ」を英語で聞き、グループごとに英語でセリフを考えながら劇を作る。

②　創作劇「大きなかぶは抜けたかな」

グループごとに最後のシーンをなるべく英語で創作し、練習する。

③　LeapFrog社のTag Reading Systemを使用した活動

LeapFrog社の絵本にはICチップが埋め込まれており、付属のペン、すなわちTag Reading Systemで英単語をタッチすると、英文が聞こえ、また、絵をタッチすると歌や音楽が流れるようになっている。児童は毎日10分程度クラスの都合のよい時間に、自分の席で自分の好きな本を読む。

ii　6年生のシラバス

6年生の外国語活動の1年間はこれまでの5年間の英語活動の体験を活かし、児童の代表として外国人の訪問者に英語で学校案内をしたり、また英語でこれからの自分について語る活動を行う。

1学期

①　ロボットコンテスト

1. 卍型案内ゲーム（4チーム同時対戦）：二人一組で目を閉じている片方をもう一方が目的地まで “Go straight.” “Turn right（left）.” などのモデル・センテンスを選択し組み立てて案内する。
2. 碁盤の目型ボックスゲーム（4チーム同時対戦）：グループごとに作戦を立て、ロボットに “Go straight.” “Turn right（left）.” “Pick up a red box.” などのモデル・センテンスを選択し、組み立てを指示し、見本通りに箱を重ねさせる。
3. ロボットコンテスト（2チームごとに対抗戦）：ロボットに “Go straight.” “Turn right（left）.” “Pick up a red box.” “Could you please ～ ?” などのモデル・センテンスを選択し、組み立てを指示し、見本通りに箱を重ねさせる。なお、“Could you please ～ ?” をつけると、対戦チームのロボットを動かすことができる。

段階を踏んでルールをだんだん複雑にしていくことで、児童が飽きずに活動できる一方、児童は目標表現に何度も触れることができ、発話に自信を持つことができるようになる。

2学期

①　自分について

『将来なりたいものマップ』を作成し、それを分類、

選択し自己紹介の内容を決め、指定されたモデル・ダイアローグ（“I like ～ . I can ～ . I want to ～ .”）にしたがって練習する。自己紹介を発表して、他己紹介クイズの情報収集をし、指定されたモデル・ダイアローグ（“S/he likes ～ . S/he can ～ . S/he wants to ～ .”）にしたがって他己紹介ゲームをする。

② 学校案内をしよう（日本語学校の留学生に英語で学校案内をする）

『My Memory Map（学校生活思い出）』を作成し、それを分類選択し、内容を決め表現する。さらに、学校案内リハーサルを留学生役、案内役にわかれて練習を行い、実際に留学生に学校案内を行う。

3学期

① 伝記を読もう

「イチロー」「マザーテレサ」「野口英世」「梯 剛之」の伝記をあらかじめ日本語で読み、英語で「イチロー」「マザーテレサ」「野口英世」「梯 剛之」の伝記とそれぞれの人物のモデルスピーチを英語で聞く。それぞれの人物の伝記を聞きながら、感想シートに気付いたことを書きこむ。それをまとめて、その人物について “I think s/he is great（kind, cool, hard-working, or courageous）because（日本語）” という指定されたモデル・ダイアローグなどにしたがって感想を発表する。

② 自分をみつめて

「将来の夢」について、自分のスピーチを考え、3枚の絵（現在、20年後、その間）に表し、発表内容を分類、選択、並べ替えを行い練習した後、グループでスピーチを行う。その際、友達と “I think you are great（kind, cool, hard-working, or courageous）because（日本語）” という指定されたモデル・ダイアローグにしたがって感想を言い合い、自分のスピーチの手直しをする。

iii 単元間の関連性

上記で見てきたようにそれぞれの単元は言語材料の関連性やテーマでリンクするように作られている。日本のようなインプットの量が少ないEFLの環境において、一週間に一度しか行われない外国語活動では、テーマに関連性がなかったり、あるいは言語材料に関連性がないと児童の知識が細切れになり、自主的に活動をすることは難しいと思われる。テーマや言語材料を関連付けることが、児童の記憶に活動内容や言語材料を留め、主体的にコミュニケーションする原動力になる。

5年生では、社会科で行った田植えから「お米について」、米に必要な水を手掛かりに「伝記『玉川兄弟』を聞いて」、そして人物を知るという繋がりで「劇『三匹のクマ』をチャンツで歌おう」「劇『赤ずきん』の結末を演じてみよう」、さらに「劇『大きなかぶ』」「創作劇『大きなかぶは抜けたかな』」というように単元間にテーマの関連性を持たせてある。

また、6年生では、「ロボットコンテスト」と「自分について」で使用した言語材料が日本語学校の留学生に対する学校案内で活用できる。さらに、「伝記を読もう」で使用したスピーチモデルとそれまで使用してきた言語材料と統合することによって、3学期の最後に行う「自分を見つめて」のタスクに活用でき、主体的に取り組める。さらに、5年生の言語材料とテーマが6年生の最終目標である「自分を見つめて」に繋がっている。このように、言語材料やテーマを単元間また学年間で関連付けることで、児童は現在持っている言語材料を使用して主体的に活動でき、テーマに合わせて英語以外の知識を持ち込み広げながら活動できる（Ellis，2003）。

（3）児童に対する調査結果

今まで戸塚第一小学校においていくつかの調査研究が行われてきた。第一に、戸塚第一小学校（2009）は児童に対する意識調査を行っており、「英語の活動が楽しみである」と答えた5・6年生は、5月には

60％であったのが、11月には82％に増加した。また、「英語の時間、相手に伝わるように話そうとしていると」答えた児童は、81％（5月）から88％（11月）へと増加し、「先生や友だちの話を聞くとき、相手の言いたいことを考えながら聞こうとしている」では76％（5月）から81％（11月）に、「グループで話し合いをするとき、自分の考えを話そうとしている」では67％（5月）から68％（11月）に、「友達のよいところや頑張っているところを見つけようとしている」では、64％（5月）が68％（11月）に増加している。

また、カレイラ（2010）は戸塚第一小学校の3年生から6年生の英語学習に対する意識調査を行い、今までの先行研究（e.g., Carreira, 2006）とは異なり、5・6年生のほうが3・4年生より外国語学習に対する動機づけが高く、また、5・6年生のほうが3・4年生よりゲームやクイズを楽しく行っていたことを報告している。

さらに、カレイラ・執行・下田・坂元（2010）は5年生の最後に行ったTag Reading Systemを使った活動の事例報告を行っており、その中でTag Reading Systemを使用した活動は児童の語彙力を高めるのに効果があり、参加した児童はTag Reading Systemを使用した活動を楽しいと感じており、これからも同様の活動を行いたいと思っていたことを報告している。児童の自由記述の記載には「最初はあんまり自分から読むことがなく先生に言われたからやっていたけどだんだんおもしろくなってきて、自分から読むようになりました」「すごいタッチペンだと思いました。これからも読んでいきたいです」「またしゃべる絵本をつかってみたいなと思います」などTag Reading Systemを使用した活動を楽しんでいる記述が多く見られた。

4. 考察

第一に、日本語の使用について考察していく。5年生の「お米について」では、ALTの英語による米に関する説明を補足するため、学級担任が社会科で学習したことを日本語で追加するなどのteacher talkを日本語で行っており、これらは児童の活動への理解の深まりを助長する役割を果たしている（吉田・柳瀬, 2003）。また、5年生の「伝記『玉川兄弟』を聞いて」では、自分のあこがれの人についてまず日本語で作文を書き、6年生の「自分について」の『将来なりたいものマップ』や「学校案内をしよう」で『My Memory Map』に日本語で書きこみ、さらに、5・6年生いずれの学年においても伝記を読む活動では、あらかじめ日本語で読んでおり、それが英語を聞きとるための背景知識として役立っている（吉田・柳瀬, 2003）。また、最後に人物に対して感想を述べる際（「玉川兄弟」「伝記を読もう」）、英語である程度の定型は示すものの、理由を日本語で述べさせることによって、定型の英語の発話を個人個人にとってさらに意味のあるものにしている（川上, 2005；吉田・柳瀬, 2003）。年間35時間、週に1時間の外国語活動ではすべてを英語で行うことは、学級担任と児童両方の負担になりかねないばかりか、活動自体が限定的なものになり、内容が簡単すぎる幼稚なものになりかねない。Cumminsの提唱する共通言語能力であるCALPレベルの内容を導入するためには、やはり日本語を適切に使用することが効果的であると思われる。つまり、日本語を外国語活動で適宜使用することにより、新出の知識を補い、児童の知識を広げることができ、児童が授業の内容を理解できないために起こる不安を解消し、授業に参加しようとする意欲を増すことができると思われる。

第二に、カレイラ（2010）では、今までの先行研究とは異なり、3・4年生よりも5・6年生の動機

づけが高く、ゲームやクイズをみんなで楽しく行い、英語を覚えることも楽しいと感じていた。ところで、上記の戸塚第一小学校のシラバスを見ていくと、戸塚第一小学校は米などの他教科で学んだ内容を題材にしたCBIを取り入れ、5･6年生の認知にあった「タスクを志向した活動」を中心に行っている。マザーグースの歌やHungry Caterpillarなどの絵本の読み聞かせなどがよく小学校の外国語活動で行われるが、どちらも5・6年生が興味を持つようなものではない。戸塚第一小学校においても『三匹のクマ』『赤ずきん』『大きなかぶ』などの物語を使用しているが、読み聞かせや与えられた台詞を暗記するのではなく、グループごとに英語でセリフを考えながら劇を作るなどの工夫がなされている。また、戸塚第一小学校（2009）においても5・6年生は5月よりも11月のほうが楽しんでいることが示されたことからも、戸塚第一小学校のシラバスが5・6年生の認知や興味にあった活動を行っていることがわかる。すなわち、児童の認知や興味を熟知している学級担任がCBIや「タスクを志向した活動」をうまく取り入れながら、5・6年生に適切な活動を行ったことにより、今までの先行研究とは異なり、3・4年生よりも5・6年生のほうが、動機づけが高いという結果が表れたのではないかと思われる。

最後に、Tag Reading Systemを使った活動について考察していく。カレイラ他（2010）では、参加した児童はTag Reading Systemを使った活動を楽しいと感じており、これからもTag Reading Systemを使いたいと思っており、さらに、語彙力の向上にも効果があったことを報告している。Tag Reading Systemを使った活動では、各自が好みの本を選択し、読み方を規定されることなく、各自が自分のレベルに合わせて自由に読む自律的学習を取り入れているが、戸塚第一小学校においてこのような英語の絵本の自律的学習において効果が表れたのは、学習者が教師からことばを与えられるだけの受身の外国語活動ではなく、自分のことばを作りだす有意味な活動を繰り返してきたことが、このような自律的な態度につながったのではないかと思われる。

5. まとめ

本稿では長年にわたり公立小学校において学級担任主導の外国語活動を行ってきた戸塚第一小学校のシラバスと研究結果を検討しながら、どのような活動が日本の小学校の外国語活動に適切であるのかを考察してきた。本稿では以下の3点を示唆できるであろう。第一に、小学校の外国語活動は児童が心を解放し、主体的に取り組み、コミュニケーションをとりたい、人の話を一生懸命聞こうという情意面を育つように作られるべきであり（菅・高橋・田尻・中嶋・松永，2009）、児童の心の叫びに耳を澄ませ、学びたい気持ちを大切に育てるように、児童の現状にあわせて活動を考え作り上げていく必要がある。そのためには児童のことを一番よく知っている学級担任が授業を行う必要があるが、戸塚第一小学校の事例は、学級担任でも工夫次第で外国語活動の授業を行うことができることを示している。第二に、戸塚第一小学校の事例は他教科で学んだ内容を外国語活動で行ったり、事前に日本語で説明を行ったり、本を読ませるなど日本語の知識を活用し、日本語を適宜授業で使うことにより、高学年の認知と興味にあった活動を行うことができることを示唆している。第三に、児童に英語の表現を覚えさせるだけではなく、児童に考えさせて英語で表現させる場を与えることが必要である。このような態度を育成していくことが、学習全体に対する自律性を高めていくことになる。

平成23年度より全国の公立小学校で外国語活動がはじまるが、教員側の英語力の不足や教員研修の

必要性など多くの問題が山積みである。しかし、児童のことをよく理解し、カリキュラムや他教科の内容を熟知している学級担任であればこそ、児童の自律性を伸ばす創造的な外国語活動を行うことができるであろう。

注

i) 2学期は津田塾大学英文学科英語教育コース4年ゼミ（ゼミ担当教員：吉田真理子）との合同企画である。

引用文献

カレイラ松崎順子（2010）．統計数理研究所共同研究リポート236　小学生の英語学習に対する動機づけに関する調査分析　統計数理研究所.

カレイラ松崎順子・大久保奈緒・秋山道子・田邉紗也子（2007）．内容重視の初等英語教育：「総合的な学習の時間」における国際理解教育 *Language Education & Technology, 44,* 1-21.

カレイラ松崎順子・執行智子・下田康信・坂元昴（2010）．音の出る英語の絵本Tag Reading Systemを取り入れた小学校外国語活動 *Computer & Education, 29,* 1-6.

川上郁雄（2005）．言語能力観から日本語教育のあり方を考える　ことば・文化・社会の日本語教育へ．3-18，東京：くろしお出版.

菅正隆・高橋一幸・田尻悟郎・中嶋洋一・松永淳子（2009）．座談会：新学習指導要領は英語の授業をどう変えるのか　英語教育5月号，10-19.

新宿区立戸塚第一小学校（2009）．平成20年度研究発表紀要.

杉浦理恵・東野裕子・髙島英幸（2006-2007）．「話す力」の基盤を育成する「タスクを志向した活動」―小学校における授業と評価　日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要　第26号，77-97.

多治見市立笠原小学校・笠原中学校（2006）．平成15年度～17年度文部科学省研究開発学校公表会研究紀要（3年次）.

東 仁美・スナイダー美枝（2003-2004）．インプット重視の小学。校高学年英語活動：英語での各国紹介の実践　日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要　第23号，143-158.

東野裕子・高島英幸（2007）．小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価　高陵社書店.

文部科学省（2008）．小学校学習指導要領解説　外国語活動編.

吉田研作・柳瀬和明（2003）．日本語を活かした英語授業のすすめ　大修館書店.

Brington, D. M., Snow, M. A. & Wesche, M. B.（1989）. *Content-based second language instruction.* New York: New bury House.

Carreira, J.（2006）. Motivation for Learning English as a Foreign Language in Japanese Elementary Schools. *JALT Journal, 28,* 135-157.

Cummins, J.（1884）. *Bilingualism and special education: Issues in assessment of pedagogy.* San Diego: College-Hill.

Ellis. R.（2003）. *Task-based Language Learning and Teaching.* Oxford: Oxford University Press.